

はじめに、MBAに対する「渴き」があった

MBAというキーワードはすっかり一般的になった。このMBAとは、Master Of Business Administration、つまりは経営学修士課程の略語で、社会人がより実践的な経営手法を勉強するプログラムのこと。いわゆる、「経営のプロ」を育てるための、経営者育成道場のようなものだ。

これまでは、米国や欧州での2年制MBAがその中心的なものだったが、日本国内でもMBAを取得できる学校が増えてきている。プログラム自体はかなり過酷で、実際の経営陣が直面する問題について、大量の生きた事例をもとに、経営の基礎をみっちり叩き込まれる。しかも限られた時間と情報の中でとことん考え抜くことや、チーム一丸となって課題をこなすことが求められるという、まさに経営者になるためのトレーニングを積む実践的なプログラムなのだ。

MBAを取ろうと決意したときは、今でも鮮明に覚えている。

大学を出て、外資系石油会社に入った新入社員の秋。本社でトレーニングを受けた後、大阪に向かう帰りの新幹線の中で「ぼくも絶対にMBAを取ってやる」という強烈な「渴き」が芽生えた。それが、それまで澱のように溜まっていたいろいろなものが、ふっと臨界点を超えてしまった瞬間。ガラス窓に映る自分の顔を見ながら、鳥肌が立つくらいに気分が高揚した。

大学時代、世の中にMBAといったものがあることは知ってはいたが、実際にその世界を肌で感じる場面に出会ったのは社会人になってからだだった。

筆者が最初に勤めた外資系石油会社は、毎年2〜3人の若手社員を国内外のMBAに企業派遣で送り込んでいたので、支店に配属になる前の本社トレーニングの間、何度も取得者の諸先輩と接する機会がある。

いやはや、彼らは本当に輝いていた。

同期の中では当然のことながら出頭で、若いのに役職を与えられてバリバリ仕事をしている。外国人の上司なんかとも、堂々と議論をこなす。とにかくもう「格

好いなあ、あんな感じのビジネスマンになりたいなあ」と、憧れてしまうぐらい、彼らは輝いていた。

ところが、トレーニング期間が終了して配属された大阪支店で筆者を待っていたのは、憧れの諸先輩が仕事をする本社とは別世界だった。ガソリンスタンドの新規開店イベントを手伝うために、汗の臭いがしみこんだぬいぐるみを着込み、路上で旗を振る、そんな毎日が続く。そして自分のまわりには、けっして本社から声がかからないような、疲れた顔をしたベテランの営業マンの方々が……。

「このまま一生、支店勤務で終わってしまったらどうしよう」

そんな強烈な不安感に包まれた。

入社して半年後、本社でフォロアアップ研修があった。本社配属の同期はすっかりMBA取得者にもなったような気分で、支店組を冷めた目で見下す。ひどく気分が悪い一日を過ごした後、帰りの新幹線の中で真つ暗なガラス窓に映る自分の顔を見ながら、「とにかく早くMBAを取ってやろう」と思った。

もちろん、その時点ではMBAの中身を理解していたわけではない。ただただ、颯爽と仕事をする先輩たちに憧れ、自分がしている仕事とのギャップを目の当たりにし、「ビジネスマンになったからには、もっと凄い仕事をしたい」、そういった強烈でしかも漠然としたMBAへの「渴き」を感じただけだ。

数年後、仕事の実績が認められて、社内のMBA留学制度に合格した。その後は他のMBA取得者同様に、TOEFLやGMATで苦労してスコアを何とか出し、エッセイとインタビューという関門をくぐり抜けてシカゴ大学に合格した。在学中も大変な思いの連続だったが、なんとか卒業までこぎつけ、ようやくMBA取得者の一員になった。

しかし、卒業して分かったのは、MBAでは、けっして凄いビジネスマンになるための「魔法」を手に入れられるわけではないということだった。

MBAを通して体得したのは、基本的なビジネスの知識だ。しかもかなり大量に、古典的なものから最先端のものまで。しかし、これらは学ぼうと思えば独学でも学べてしまうものばかり。

それよりも、はるかに新鮮だったのは、「マネジメント＝経営」という概念を徹

底的に叩き込まれたことだった。MBAの授業の、すべての根幹にはこの「マネジメント」という考え方が流れている。つまりは、ビジネスをロジカルに考え、最善の意思決定をし、それらに対して責任を持って行動するということ。しかも、自ら、迅速に、果敢に、そして大胆に。この「マネジメント」という、当たり前だがとても新鮮な概念には、大いに魅惑された。そしてMBAで学ぶこの「マネジメント」という手法を駆使して、何かをやり遂げたいという新しい「渇き」が、筆者の中に芽生えた。

そう、自分の人生を最高のものに仕立て上げるためには、MBA手法を駆使して人生そのものを「マネジメント」しなければならない。

バリバリと仕事をこなし、キャリアを追求する。もちろんそれだけではなく、プライベートも充実させる。強迫観念のような「渇き」。これは、多くのMBA取得者が内面に抱えている「渇き」と同じものはずだ。

MBAはマネジメントの手法だ

さて、本書の目的は、MBAにおけるマネジメントという概念を知ること、仕事はもちろん就職や転職などのキャリアプラン、そして結婚（もしくは離婚）にいたるまでの人生の「経営術」を読者のみなさんに身につけてもらうことにある。

要するに、MBAのスキルを応用して、自分の人生のマネジメントをしよう！というのが筆者が本書で言いたいことなのだ。

自分の人生をマネジメントする、と書くと、ちょっと難しく感じてしまふ読者の方もいるかもしれないが、実際にはけっしてそんな大げさな話ではない。例えば、仕事であればリスタをしっかりと把握したうえで、果敢に新たな事業に挑戦して成功を収めるということ。キャリアであれば、自分が目標とするビジネスマンになるために必要な業務経験や知識あるいはスキルを自ら能動的に身につけていく、といったようなことだ。

一度しかない人生を惰性で生きたり、誰かの手に委ねてしまったりするのはなく、自らの手で作り上げていく。世の中で成功している企業のように、果敢にそして大胆に次の一手を打ちながら、最高の結果を出していく。そんな人生を、自分の

意思で構築していくことができたとしたら、どんなに幸せなことだろう。

けれどもここで、読者の方々から疑問が出るかもしれない。

ちょっと待ってくれ。話は分かるけど、MBAで教えるマネジメントの概念なんか知らなくても、これまで日本人の多くは幸せな人生を獲得できてきたんじゃないか？ だったら今さら面倒くさいMBAとやらを勉強する必要なんか別にないんじゃないのか？

おっしゃるとおり。異論はない。自分の人生をマネジメントしよう、なんてMBA流の発想を持っていなくても、日本人は大学を卒業し、企業に入社し、結婚し、出世し、家を買ひ、子供を大学にやり、そしてたっぷり退職金をもらって、悠悠自適の隠居生活を送ることができた。

ただし、これまでは、である。すなわち、「マネジメント」しなくても生きてこられた時代というのは、戦後の高度成長期から日本経済が成熟に至るまでのたかだか数十年の話なのだ。

戦争直後の何もなくなってしまった時代、日本を立て直した人たちは、すべてをゼロから作り上げなければならなかった。そして苦しみ抜きながら、彼らは企業と自分をマネジメントする力を自然と身につけた。

けれども日本が高度成長時代を迎えると、次の世代は、大きくなっていった日本という国と企業にのつかれば人生を進むことができるようになっていった。目の前の仕事をこなせば業績が上がるとラッキーな時代。まじめでいさえすれば、それなりの出世と、順番に管理職の地位を手に入れることができた時代。運が良ければ役員まで上り詰めて、結構な金額の退職金を手にすることができた時代。私生活でも、まわりの様子を見ながら、「大体こんな感じだろう」と真似をしていれば、そこそこの幸せな生活を送ることができた時代。

人生のレールに乗ってさえしまえば、あとは会社と社会がしかるべきところにあなたを運んでくれる。いや、あなただけじゃない。会社だって、いや国だって、大したマネジメントもなく、「高度成長」だとか「国際化」の波に乗って、大きくなれた。

そうじゃありませんか？

でも、時代は変わった。

右肩上がりの経済成長なんて、もはや二度と望めそうにない。

マネジメントのなかった企業がどんどんつぶれていく。具体的には、規制や既得権益に守られた「最も安全」と思われていた業種から。そして同時に、ホワイトカラー不要の声が現実のものとなる。いわゆる「中間管理職」と呼ばれていた「普通のサラリーマン」たちが、「いりません」と実際に肩をたたかれ始めた。

日本の失業率の低さのひとつは、こうしたホワイトカラー層での就業人口の吸収能力の高さがそもそもあったから、そのホワイトカラーそのものがいらなくなれば、当然雇用の枠だって減っていく。一流大学を出て、職がなく、フリーターをします、なんて人がまったく珍しくなくなっている。「格差社会」なるキーワードが登場してはや数年がたとうとしているのだ。

では、どうすればいいのだろうか。企業の場合は？ 自社の特性とマーケットを冷静に見据え、経営の再構築を行うしかない。そう、マネジメントの見直しだ。ならば、個人は？ まったく同じ話だ。自分の才能、特性、年齢、好みなどを見据えたうえで、仕事選びから、仕事の仕方、そして人生の進め方に至るまで「マネジメ

ント」しなければ、もはや生き抜くのが難しくなっている。

これからの時代、普通のビジネスマンにも、MBAの手法は絶対に必要になる

MBAの手法とは、企業活動を最適にするマネジメントの手法だ。企業を冷徹なまでに客観的に分析し、何をしたら最高の結果を得られるのかについて生々しいケーススタディを使って実践的な経営術を身につけていくプログラム。具体的には戦略論、財務会計、マーケティングといった実学から、論理的思考や意思決定論といったものの考え方の基本的な内容までカバーされる。

例えば、自社の強みをレバレッジして競合他社が真似できないマーケティング戦略を展開する、十分なデータがなくてもロジックを使って成功確率の高い次の一手を打つ、あるいは当たるとデカいがリスクも伴う事業をどううまく育て上げていくのかなどについて、とことん考え抜くトレーニングを積みされる。そしてその結果として、自ら果敢に企業経営をマネジメントする手法を体得していく。

こういったMBAの手法は、自分の人生を経営するのにも十分に活用できる。日々

の仕事で最高の結果を出すためには、単に機械的に手を動かすのではなくて、どう考えて仕事を進めたらよいか。あるいは、これからの長いビジネスマン人生をどのように設計していくことで、市場価値が高く稼げるビジネスマンであり続けられるのかについて、多くの洞察や示唆を与えてくれる。

もちろん、このような手法を自ら試行錯誤を繰り返して蓄積していくこともできるのだが、それでは少々時間がかかりすぎてしまう。せっかくだから、すでに存在しているこの素晴らしいMBAの手法をさっと身につけてしまおうではないか。そして次に、人生を経営するマネジメント方法について、自分なりの手法を確立すればよいだけの話だ。

この本では、MBA手法の使い方を具体的に紹介

本書では、MBA手法の具体的な使い方について、3つの視点から見えていくことを考えている。

まず第1章は、バリバリと仕事をするために、どのようにMBAの手法を応用したらよいかについて紹介したい。単に指示されたとおりに機械的に作業するのではなく、何もないところから新しいものを作り上げなければならぬ局面に直面しても、頭を使ってしっかりと付加価値を出せる仕事の仕方を紹介する。これは、ゼネラリストを目指すビジネスマンにとっては絶対に必要なスキルだ。また専門分野で戦うビジネスマンにとっても、自分の強みである専門知識で立ち向かえない難しい問題に直面した場合に、問題解決への道筋をつける手法になる。具体的には、鋭い分析力や洞察力の身につけ方といった内容から、コミュニケーションやプレゼンテーションの手法、プロジェクトの目標やモチベーションの管理といった内容について紹介していく。

次に第2章では、キャリアマネジメントのための考え方について触れる。単に積極的に転職をするための手法を紹介するのではなく、ビジネスマンとして最高の付加価値を出し続け、絶えず成長を繰り返し、なおかつ自分の仕事から得られる満足感を最大にするために、自らのキャリアをどうマネジメントしたらよいかについての考え方を紹介する。具体的には、自分の持っている強みをどう評価し、それら

をどう活用して今よりもやりがいのある仕事を手に入れていったらよいかについてアドバイスする。結果として転職の指南書になることもあるだろうが、これからの時代に自らの手でキャリアをマネジメントしていこうと思った場合、転職は避けず通れない選択肢なのかもしれない。

そして最後の第3章では、充実したプライベート生活を送る場合にどのように考えたらよいかについても簡単に紹介する。いくら最高の仕事をする事ができたとしても、私生活が破綻してしまつては人生の価値は半減してしまふ。例えば、不幸な結婚生活を送らないためにはどのようなことを考えたらよいかといった話についても、MBAの手法を使った考え方を紹介していく。

MBAを自費で取得しようと思うと、2年間の留学期間と1000万円以上の費用がかかってしまふ。よつて、すべてのビジネスマンが手にできる資格ではないことは事実だ。この本ではMBAのエッセンスを仕事、キャリア、プライベート生活に当てはめて、より実践的に紹介することを目的としている。つまり、これさえ読めばMBA手法の使い方の基本は身につけられる内容になっているということだ。

まずはMBAの基本を理解し、さらにより多くの実践トレーニングを積みたと思えば、実際に留学すればよい。仮にそうでなくても、この本を読み毎日のビジネスマン生活に応用することで、MBA取得者と同レベルのマネジメント手法を身につけられるものと自負している。

ただし、とても重要なポイントだが、MBA手法はあくまで道具でしかない。マネジメント手法以外の何物でもないのだ。その手法を使いこなすためには、まずは仕事、キャリア、そしてプライベート生活に対する強烈な「渇き」がなければならぬ。

今よりも凄い仕事をしたい、最高のキャリアを構築したいといった強い思いがなければ、MBAのマネジメント手法といえども、やはり単なる小手先の技に成り下がってしまう。本書では、この「渇き」に関する部分には触れない。が、この本を手にする方はきつと癒されない「渇き」を持っているのではないだろうかと類推する。だとしたら、この本で紹介するマネジメントの手法を、砂漠に水があつという間に吸収されるように、取り込んでしまふことができるだろう。

そして、この本を読み終えて数多くのMBA手法を手に入れた後、さらなる貪欲なまでの「渴き」が読者の方々に芽生えたとしたら、そこがこれからの自分の人生の出発点になる。今よりも、もっと成長するために、「渴き」を癒す何かを求めて疾走する人生。著者が、そして多くのMBA取得者が無意識のうちに渴望しているように。

それでは早速、本論に入っていこう。

第1章

最高の結果を出すための MBA的仕事術
